

畑久保西遺跡

(相模原市城山町No.4 1 遺跡)

調査期間 20080501～20080715

所在地 相模原市城山四丁目
地先時代 縄文
(早期・前期・中期・後期)
古墳～古代
中・近世

作成日:20080829

概要

畑久保西遺跡は、相模原市城山町城山四丁目地先に所在する周知の遺跡です。一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)建設事業に先立ち、国土交通省関東地方整備局相武国道事務所の依頼を受けた財団法人かながわ考古学財団が、2006年度から2008年度にかけて3度の発掘調査を実施してまいりました。

畑久保西遺跡は相模川の左岸の河岸段丘上に位置しており、遺跡立地面の標高は約154～157mを測ります。これまで実施した調査によって、中・近世、古墳時代～古代、縄文時代の集落が展開する遺跡であることが分かってきました。なかでも、発見された遺構数や遺物量が卓越する縄文時代は、本遺跡の中心的な時代となっています。

縄文時代の遺構は、早期～前期に帰属すると考えられる竪穴状遺構(たてあなじょういこう)・炉穴(ろあな)・陥穴状土坑(おとしあなじょうどこう)・集石(しゅうせき)、中期～後期に帰属する竪穴(たてあな)住居址・配石遺構(はいせきいこう)などが発見されています。竪穴状遺構は、本遺跡で発見された遺構の中で最も古いもののひとつと認識されるもので、遺構内や周辺部から撚糸文(よりいともん)土器が出土しています。炉穴は屋外の調理施設と考えられているもので、複数の炉部(ろぶ)が複雑に重複し、平面形がアメーバ状をなすも



▲竪穴状土坑(縄文時代早期)



▲炉穴(縄文時代早期)

のが少なくありません。陥穴状土坑は概ね長方形基調で、逆茂木(さかもぎ)が設置されていたと思われる坑底ピットは、中央部に1~2穴が配されるものと、坑底面外周を中心に多数の小穴が配されるものがあります。竪穴住居址は楕円形プランをなす4本柱のもので、石囲炉(いしがこいろ)を有していました。中期勝坂式(かつさかしき)期に帰属するものです。配石遺構は、大形礫が集中的に分布するものと、土坑状の掘り込みの中に大形礫を単独で配したものが存在します。前者は後期、後者は中期に帰属する可能性が高いと思われます。



▲竪穴住居跡(縄文時代中期)



▲配石遺構(縄文)